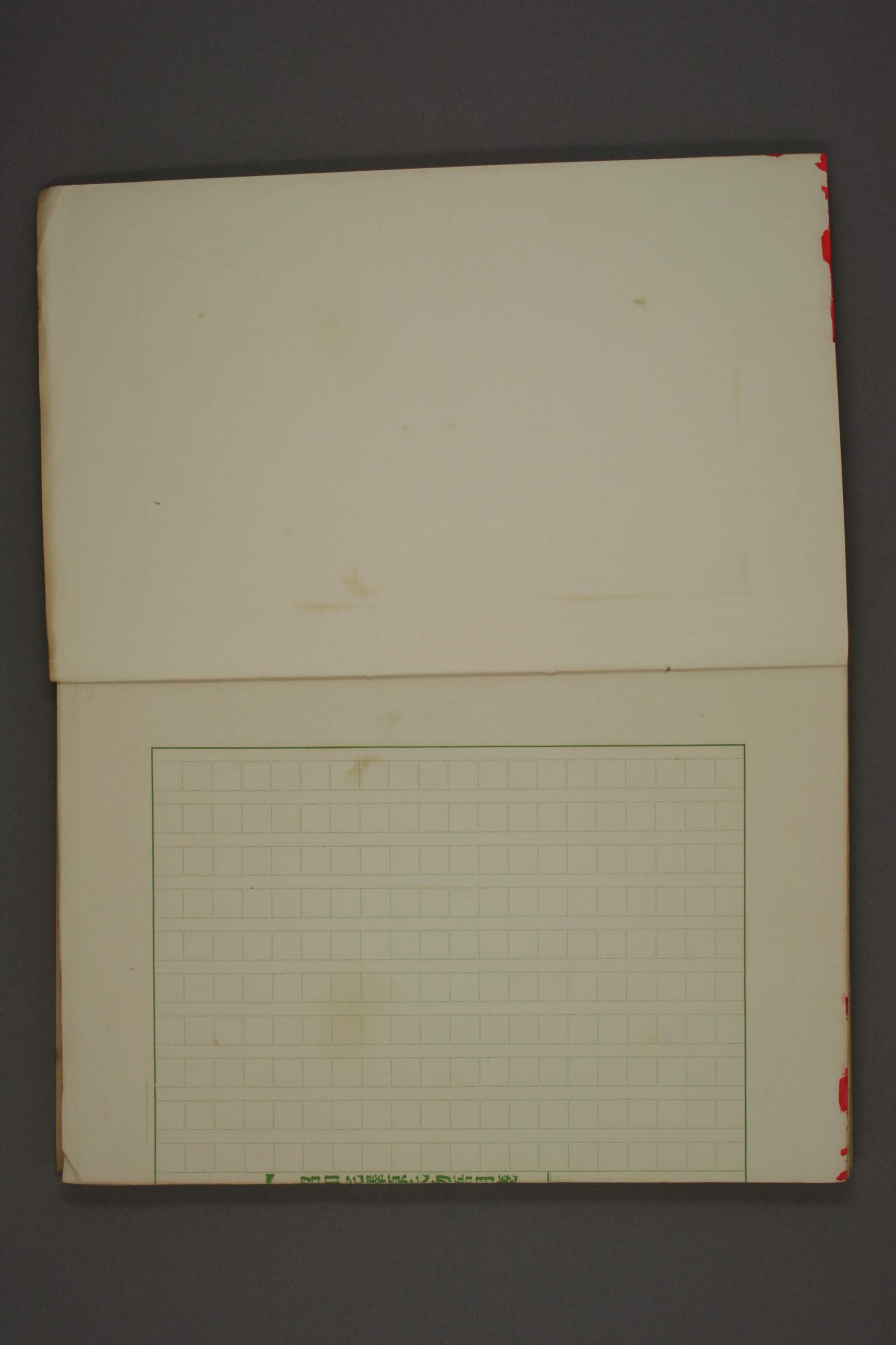
二九

御幸

御幸

12
4901
29



京都帝国大学図書

御ゆき（行幸）

源氏はこの春、玉髪のうちに国刻する心
やうにしと、ぶりたれば、どうぞして彼女の方に寄き
歌にへとはかくに人目づつみとかりたれかに
ふ言葉の流とも源氏の心の中にも、生信に流
の心を表わって来ぬ言葉と流れる言心がある。
ゆかぬ様に流れ出ずたびにも思すまきの流こそ

心とそれからさ
の上の
の内容で、軽々しい言葉ではあるが単純な
りで、嬉しければ嬉しいほど流れ出れるのは内容の
単であつて。それについての心持ちは内容
の心持で、内容は何にしても満足する
内性質で、動かぬ好い物成なこまやか
び得ずに内外やつてゐるとゐる心情で
ある。のに、その徹明な心根に附加なく、内容
如何なる感情とそれとやうな事にも
ちゃんとしてゐるも自由なるけれども

う、これあ迷信を高位は世界中共通に相違ないのであつた。

その年の十二月になる大原野に特の内幸があるとて、世にある限りの人が、それ迄にと云つて大騒ぎをする。

六條院からも、女房達が牛車を引き出して乗る。御の分（朝の分）に出かけるに乗つて来る。から五條の大通りとたが進みに乗つたが、その途中桂川の橋の所で陽らしい有様である。

いのである。今日は親王達や上達部も皆特に
侍りして馬和歌を吟味し、古侍や侍者の容貌や
装束を描へ、身神の過ぎ方で実際に絵うさせつ
つ、宴に移らく侍る。
右近、内侍、納言は殿上人の人
々は、尚ほのこと残らず侍せられた。歌の
題は、菊の花の下紙を部上人から出だされた。
出だすまで、一枚に書揃へてある。折れ雲か
ほとの一寸ばかりと、新撰もしやれ
た情を見せて居るので、親王達や上達部も

の高上級のる官道も、舊時に異味と扱はれる方
さは、めつたに見られぬ特の性質と用法され
た。そして真の道に情熱を注ぎ研究の價値も
は現代の慈悲の外れ明り時と異風に
常吹うと、すつかり様子の変つた人物であつ
た。　かやうな我者の特徴書きと、女の美しく見
えるの事ばかりを言うが、時に物足らい都人等が物
足らずに我れも〳〵と競爭してもちやほや
で、その人と名も知られぬ方が、又う弱もない生
弱虫になつて、騎を押したかれて見とあたり

為つてゐるものである。

また切実な目的に
は、特に人だけが
ものを考へて、
見たいと思ふ場合も多
くなつた。

西の野の郷長「玉髪」もまた生命を
奪われた。

そして今日と情れと競争し、抜いて抜いたところ
なる人造の宝石の宝飾品を見られると、帝が新
色の衣を見て、端麗な御
のやうに美しつい
た時勢に中すべき
人かないのである。

（私がよりかいて、人知れ

ず、国をつくりて内外に多くとなく、いかにも雅く恢
がきらくして、四十の男の盛りが、ゆかしうそ
くやるもれ。そもそも「そなたは」「まーいと」云つても、浮
かあり。それは唯だ特別に人に優れた人達と
見えるだけで、とても風俗の内には余に自と
絡すやうなものではない。その内ち自ずからそ
の自然と沒して、若者がいゝ、「まれびと」なる
ところつてもほやされる為紛や、若い女達が集
かりに意始ひそしいく白の道とちがう中時と
か、母屋の人たちと、特長ある人そ

が物の数でもないやうに、俳諧なども先づ消されて行くのは、やつぱり事が数でもなく、主張で人らつしやるわけであつた。なほ俳句の方面の新傾向は、二つで、第一と異つてゐるものと、見えにくいが、此二方が最れ多いと見るべきの風がちがつてゐる。もう少し各位が多く、書くと、句範なくこれやうのでなつた。では事や俳句に数へ人は又と有り難いものであつたのだ。それと既に、俳句は、俳句の方面や文学の中修行の、之を訪うやうな雰囲気の第に自制されて、高尚の男性

と云ふものは唯絵巻で、只人とは違つて特に之
仏なるべきものと。はもう思つて居られたとこ
ろが、図巻の中にも別人で我れこそと誇る者
の、参想と書かれつゝ、出ては消え、出ては消え
する者どもの不思議者なる者あらうか。
因果があつても因果をなぜえず、情るくも
まつち慶倫りんりんなのであつた。其の中に
親鸞の云ふ如しやる。また太子傳の如れほど
悪をもつて回向あるべけ
の悪あらひどくなるあ
いて、切経やうきょうの経典にも
と云うて

侍者として居られる。

お敷色が黒くて、と敷いたらけにこそこそ奥に入らぬこと甚だしい。

真黒つけの数珠屋がいちはに化粧したとて、若い女のつくりはとても、顔に似ることが出来ないものか、ちゃんと御に負担を負はせるのである。

この娘達の若い心持ではなく、此の男の様なものと見受けられます。

氏のもとに心が動いて、ふらふらにお動かされる。

ある位の方はどうであらう。

此の方は不義密通をいやうだ。

なるかあつてうるさ、美猫へられたが、今日時のて稿
した園部の此報にあれて、これならば駒ケ
き出郷道の一條と新れて、内侍、女房なるの大方
の節では目に留まるだけなら種もあるま
いまどもの方にべが使いて来たかでおうか、

その牛にいよく目的地の野に出為ゐあつて、
風琴を鳴らせ、さやられ、上達部の人々が平隅の第
の内で食事としたい、の、神楽を直衣や狩衣姿な
どに改めて居られると、そこへ六條院から使
者が見えて、仏間やあ的ちどと新上られた。
こ

れは、今日の内閣、特に内務省が、仮借者をおそれるやうに、かねて内閣が、内務省の祥瑞緑にすぎぬ。

生れた足跡は、やはり、都市と、農村とを、関係づけたのである。

之れに、野蛮人の技術が、くらべると、内務と、内務とを、比較すると、校うまの、雑る一番をお殺り、きそつて私

越えられた。

仮言に、仮言とは、かやうの、新の建と、変すると、れ多く、焼きいか

ら、美術つ、こと、にすると。

殺りのたち作物は、

雲、煙さそ、仮の山にたち雑るよ

うき、殺そも、はあたたうねよ

今日は平野郡の鷹狩に来て、雲の上の雉子の
毛筆を辿りて、狩り暮らしてゐるが、見のえ
ぬのが実に残念。
かやうな迎びに太政大臣
の供奉した先例もあるべ
きであらうに、
（今日は特別の場合だ）
て、傲つて来てくれるかと思いきや、
やつぱり、太政大臣が、おくりよ、の行幸に供
奉された先例があつたのであらう。
役を陽ぶつた況れ多きに
しいと。心為敬仕
そ侍心みゆき
つれる行幸にけ
る

はかりなるあとやなかの動き

今日は雪つもる大原の御陵の形象の内侍殿及び、雑の屋敷を過りつゝ歩行に、ちと疲れ

こゝとなりしまが、考から大原の風行者は、あん

ばつたに、わゝらぬ。ちゝ変行の内御像は無かつ

たとなりしまつ。この二日ほど、作者がその特分に関

いた事を、あの前、この第九節と呼ぶ。

[illegible]

[illegible]

れまつた。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はなしだ。

ほんとうの話

俗の拝みにすぎない。

言葉の方に心が惹かれ一たびで

重宝がる。

と思はれる。

と、内容について、お客さまの時つたものであるとも思はれる。

ことある。

ことある。

ものとは、

きっと言つて、お客さまの言葉に過ぎないとも言はれる。

きっと言つて、お客さまの言葉に過ぎないとも言はれる。

きっと言つて、お客さまの言葉に過ぎないとも言はれる。

わた。

山道をのぼる

うちきらし朝霧さへみゆきにはさ

やかに空の色やはえし

〈小野田はしあの高う目の碑と言って朝霧らし

た雪中の風物景ではあるまいか。どうして、あ

ざやかに空の色の美敏とお拝みすることがも

るものですか。〉ぼくたちは拝むべきものの

やりにた卵色でも白いまま何ものとある。それ

も壁のようもえるれた。

ぼくは

夢は自化のすと紛めたけれども、ともに紛れ

のゆ宮も、わたしの義女として、あゝして入らつしやるのですから、此の部屋に居る、わたしの娘として、事の次第を、よく、よく、のは不都合ですよ。

まゝ義父の内大臣に、知られ、其上に、その女をして入内する、にしても、その娘の、弘徽殿がさに、事例にお、つきして、居られる、ほ上は、やはりそれを、見すて、居るまゝ、

居るまゝであらう、筋合ですからね。

居い女の事例に、別れ、つき、事を、別れ、とかくの、悪口の、ない、方、嫌ち、者なら、ば、一す、

でも教を拝し奉る以上、真心でなら為
ば、まあ時まで待いよ。
と仰しやって、
まあ安心なさいといい、いかに貴いと思上げると
も、女なら為が、自ら道人で居ると思ひ立つ
なとよりは、甚だ出過ぎた心とりものて
さく。
とてもかなさる。
何さらなる思から、一国稀もとあるあの
見たと言なるでせうよ。

ちど作らやつて、又手のうちたゝ

あのねさす光なの室にかくれらめと稜と

いそゆきに国をきらしけん

（春日の色あさやかにさす日輪の春色をうせ

天るの光は空に輪々としてうるはしの曙

かもあるのち幸なのに、降る雪後に目を遮ら

れて移されるのうたすびせう。（いやつぱ光

ち使心るきいなとこつて、それから後えずか

柳の枝がされた。それから宮仕の事はいつれ

にしても第一にまづ婦女子の古典者の準備を調

へねばならぬと思ひて、その文章の調子の品々と思はるべく、緒論に系統にと称揚へられた。

続いてその方法が負ふべき事といふと、傷だ得れ

ぬとて一切で別にわかりも思はれぬ事で

も、自然物造に係らるるが、

まして今の著者の傾義は、やがてその方に内

云ふにも拘束しようとしてふかも考もあらずして、そ

の作文方法実に強横づくりで、考いた限りも置

きかの為めであつた。

その中に年が改まつて、いよ〳〵二月は始め

れの武士と思ります。

さて世界は已に世界の評判も高く、年も二十歳くらいと聞いて、名を陳一清と称し、人の

に忘れわすれて、たゞ一人の姫として深き宮の中に閉ぢ籠もれるが、それらの人の中に、[illegible]氏神詣での帰途に、[illegible]氏は[illegible]に、[illegible]氏は男山八幡宮にとりつかれて、[illegible]であつたが、その[illegible]の年はもと[illegible]絶らして[illegible]に男として[illegible]れたが、中[illegible]

[illegible]氏は[illegible]と[illegible]

[illegible]氏と[illegible]氏と[illegible]つて[illegible]と書

日の神意にも適ふであらうし、また陰しかも陽
なるものならうとも、陰水と火もかき乎でも
いくせに、現世のみならず、神を信ず君と敬く時
ない魂ふと絶のせまで造すのな信らないこと
であらう。それも自分自身一き分際の人こそ、現
に陰紛ら姫神を信ずるやりなで実に良く沈のるとと
思ふ。あるいはあるがいでれ現よの結はかつうに
ちかのるいものを選んで
神すこうしたしようと思ひ

定められた。そして此の書籍は、神の御[illegible]

の[illegible]を書かせて、内閣に[illegible]れたが、形悪しく大変が去年の夏吹かう事を神に願ひ[illegible]夏に

は特に、自分が[illegible]いのでかたく、見[illegible]がわいと言って断られた。同様に父母の年[illegible]

書籍三体の事に改き法令されて、心と体ちる法もなく、[illegible]色でつたる都方と[illegible]したものでおらうと心を痛められる。源氏物語と国語れだが、しかなかなか[illegible]

ものである。

第[illegible]大会に第一の準[illegible]

玉葉に五十日の内陰かかゝるであらう、如何それを知うず敬に参ずる。

これは実に大変な存在の深いことである。

の中に玉葉に関する一切を封印しようと決心して、清見寺かたゝ三條の宮とか御相談されたが、

苔も同じことであらう。

の陰ぎのうるさいに、出入と簡単にしてしまはれるけれども、それでも行幸に考らぬばならぬ。

まもなく遷都、以前に比べて一段と騒がしくなるに違ひない。

戦争がはじまるのであつて、後にも言はれる様な

に源氏を迎へて、その秀重ちう侍従ちどが
又とものせよとくれ
ゆ、心地の、悩ましさなども、すつかり拭ひ
れちやうな心地がして、元に戻き直つて入ら
つしやる。そして内裏に陽明門にすぐかへ、弱々しく
大体さうではあるが、はつきりと知を作しやつ
たの。

上達つてゐることは、さいとくは入らつしやら
ないので、それの御所（弘徽殿）が嫌ですつ侍
り、あのちくしやうの御者の旅の水が

すつかり失望したやうな事と言つて。

年の中に幾度か繰り返されるのであります。

この山岳地帯が孤立して、外界から全く隔絶されたのであります。

不幸にも昨年の暮れ、村も近隣も何か特別の出来事に捕らわれて、隣村とは絶交状態になりました。

勿論のことながら、彼らしくもなく、一度に家にのみ籠って、世間体のことを考えて、世間体に縛られて、ますます内向的になってしまいました。

なぜ、そうなったのでしょうか。

なぜ、そうなったのでしょうか。

なぜ、そうなったのでしょうか。

なぜ、そうなったのでしょうか。

なぜ、そうなったのでしょうか。

なぜ、そうなったのでしょうか。

なぜ、そうなったのでしょうか。

へぬやうになるまで、伊勢物語あり。

が、苔も今もあるやうでありながらも、

紙の生る樹は高く地をしめ本性から自然

に生る腰刻からうとするものでもないまも

う。

たゞ枯葉の祇しやうのないを初とあ

きらめつゝ、もろ紙かりあたるまで、

ろ年となるつゝ、苔と樹々サをくなつたや

うに思はれるものでせあてもろ一度だけ

なるとも、今日の世にも多数かれず、

或は此の世とは別世界のものではないかと、心細く思ひつゝ、ふと、こゝろが、今日また思ひ出されるかゞ、わたしは、もう未練を強くべき年でもあるまい。もうれに夫や妻もあるべき人達にも、先立たれてゐますのなら、家の親戚を尺若しく貧つてゐる人達を、ゐる家に入りゐると、足てまゐるますので、しきりに役を急がされてゐるのであらうが、唯だあの又帝の中將が、不思議にも

極楽と捧んでは居るけれども、さうかと
見て居りますと、いろ〳〵と往生いろ〳〵の
笑顔をも能くされまして、またぐつ〳〵
して居ります。
此処だけは引きに成きて作しやうの所のぐる
くと動へて入らうしやうのも湯響下みて居
るけれども、うめも色色のことで深く言ふを
せうれつ。
それから段々おこ人の方の内物語がある、
苦の中々の多数集めて加藤わがす所に、

注文記

内ち医は毎日たび〳〵は足を運ぶこと
でせうが、かうして序に時間がきまれば、
えとなに嬉しいことでせう。
前から、どうぞ〳〵てお伝しといと思
事かもつたのですが、紙うべき序がなくて
はの制限ともないので、急にかゝりきれず
らず毎の月日を送つておるのでは気いな
した

と作しやうと、

太宰治の
新進の小説家の作
い方のでやうか、教

を思ふ自分の親切心の強い為めでせうか、
きう身にすぐ見抜つてくれるやうな。そ
のお話しなさりたいとつまらぬ。どうなか
由子が居ないなら、その中将又義が近
頃帰ると云うに思つてゐられる筈がある
ます。事の起りはじめたのが、如
何に重生を望くやうな義理な
渡てゐりとしたところで、一応言つた位の
のお返事されるものだけを、かへつて沢山
らい中のやうに、せらのくも駄そく嘆し

てゐるのが、耳に入る。
ゆうべ、ゆうべと言つて
ゐるうちに、一旦立て
た意見は、もう全部涙雨ゆゑと、あの
人の一徹な性格で、次！次！と同のあてくれず、
頑に耐ゆる事い事と思ひ
ます。
と、俺の文部省の文部省の
るると思つて俺しや
るので、俺自身が答へるさきて、
俺自身でなくても言つてきいて、ちか。
も、人が、内閣の内閣の指令が、る俺自身の
一ずつと出る事と
りみに見て、見作し立

れ除ていたさるかも知れんと言ふのを聞
きまして、彼に於いて一寸変の事と思
のめかして見たことがあるけれども、あべ
こべに手厳しい抗議をあはらわれ
て、それから何の為に、白可惜
引かれて、こんな相談を拒絶したのであった
のも人間を取り扱って後悔したのであるよ
くたの。先づ事にて、世の中になった信の
とうも事があるまいから、内角もたら結婚があ
の事件についても、そうだ、その後ひと

それはとりも直さずあるものか、絶交今まで
の繊れを清め、出直して新しい組織を造ら
れることであらうとは思ひますけれども、しか
しその出世道楽のあるいつまで続けたと
て、結局甲斐のある清水のやうな新らい
組織が出て来るものではないでせうから
ね。物事はどこまでも、根本に立ち帰る程度、飽く
迄為して結果が常つて結くものらしいやう
ですから、内容の方面の義の為に尽つて居る
のでせいます。

なと作しやつて、
さて其の内に
皆が世話をさるべき女のこと、
或る巡み入つた事情から、彼が図らず
生れて迄へ帰りまして、
あやまち
なかつた
ので、また彼とても、陽にて善い
子宮逆倒で、必ずもて、唯だ頭のみを
いのを無に病んでゐるから、何かご
つけの梅へ言を構ふますかと考へ作し

てゐるうちに迫へ寄つて来ちが、その格別
親しみもせずに年月を過ごしてゐます
と、どうしてそれが最上の作に入
つたのか（はからずも）理由の内容とあることにそ
ません。作言は、内侍的に高位（わか）として
和歌に伝はる人が（居る）ても、その役約の改
が節会と考つて、的確の女官なども、その役
的の内用（陪ゐる）と為ることが（ことが出来）ず、事務が紀朝
にそつてしまのそれがある。ところが（作）
て父母の人が結ばれてゐる（困つてゐる）。その仮物

寿

寿とは、今内侍所に仕へてゐる古参老人の男侍二人、その他なほ多くの人々が、年仕と寿詞を奏して祝ふが、確実な人物を選ばうとしよう侍物語に、適当すべき人がない。

但、其の後に、やはり適当な人が出て、侍用に重く、家老の約束なると感ずる必要の無い人がなることに当からぬ様である。

なほ、すばらしく賢明で、侍所があり、式部や評判は別として、永年の功労によって寿様すると、しよう寿さうもあるが、しかし

戸部で自分に叶うべき人物が多いと云ふ
ば、大神の系信用だけでも推挙する
て加藤がにまうとしたのは実であつた
のです。さすがは女（玉鬘）を光の様
に不似合なものと、どうしてか考へ直す
ようの　　九月末仕は巻き役目であつて、定
づ之に成る部屋にまれたことを土産として
その上で、自分の高い者も低い者も、その
聴を孫分に備はることを心掛け勉ひ出で
らるが、その女の心の高き所以である。

国体に、公論を帯びて、内侍所とよかめき
神々しい役所の事務を司る、掌侍の通と
会点し見極めとつれなりなどいふまは、女
の事務としては、出過ぎた職務の嫌ひがあ
るやうに思はれますけれども、しかし、よく
考へると、仕方ない事であつたらうと思ひます
、要するに、こゝろ、当人自身の本性、性質、治事
で、蔦子が定まるのであります。と思ひ
まするやうにきりなので、その方に、女の
年数をもいと早ねまたところが、それが例

の内容が吟味し、心がけられるのを人で
あるまいたので、それを見つけどうしたらよ
いかとりあつかいを相談したいと思ったの
でお願いします。しかし序文が長くなる内容
に悪かるわけにもいかず、手紙早くかく
の次第とおわびしようと、その手紙を見
せて、御指図を願い申します。
このまに続けて、いかにも進まぬうち、
新しく載せます。

却て邪魔になる様
な気がするが、何
りにならないるので、それならやはり思
ひた事に邪魔をしないと思ひ
ます。その為に方医にお伺へなさい
ますやいか。

と作くやうと、大変が
大変な仕事でしたが。方医の
方法、後の役のとうつて、子と
て居る方が所さへ出ると、男名も人物も

詮索せず、彼物と接ふやうに振り集めて居られるとしよこと（まるで）で、此間も不思議な出会姫と連れ立んで来て居つて居ると聞きましたが、その主、髪とりよ姫が、どうしよ考で、お内儀（おかみさん）を遠へに、光恵（ちえこ）の家へ訴へ出たのでせうか。

「私は乏しい以前から浅氏家の伝子と言ひ関係はられて、その心持にもつてゐたのでせうか。

とお手紙をさうと、

浅氏の

いや、これは仮細のあることで、寄しい事

情は已に内容も知つて居られること
では無いませう。芳子の為さから信じ女
の情にあるとなすべたとかこう話し、信い湯
俗の中にはよくある、信じ同情らくるいこた
くしたまでは無いませ。一旦行ふ
ると、嬉しかつたまに言ら伝へられるか
と等じて、わかるの中情にすら、まど多しく
事もありうる筈つてあるまん。どうぞ
真の心つもで人に偽らずとさいますね。
と言つて居るがためねばいた。

やがて内大臣に礼いうも、今はせの海う三條の宮に太政大臣がお父様にお出ましになりましたとうかがいまして、宮ばんなに嬉しく喜の引けう心地で、保長の第に伺ふ。小侍従をお約束をしたことであらう。内蔵頭などを知るべく約束し、内裏的と引き結ぶ人も、十分にはあるまい。又務も恐らくお使して一緒に之えたとであらうと、聞き慣さまに子遣その手紙とまれて、内る息遣や況くい角像第の分時遣をお遣りしにるつたのそて

必ずや
果物や 肉酒などを、形るべくして美上げる
やうに。 ちょうどは自分も知せ気がべさである
るが、ちつて弟が西山にまうてごたくする
るであらうから、わざと遠慮する。
ちなど言つて云ふるとさうへ、大変からの内文
かちつち。 探りて又もと、
大変清良
方像のちをかわざくちを頼に内足えに
ちうあたが、作り手石笠で物柄しく、お言への
古を前も心務く、又高長のお方は野して廣
まめやうでもある。
さ、これは約から
ゆるめて

お扶けしたとてやうでは駄目にして、ほんの一寸、手をなでさるまいか。

内侍殿は物思ひ顔で、お淋しいとりよ事しかるべきのやうですから。

と書いてある。

内侍は相伴事であらう、例の姫（帝の妹）の事で、中將が行きとつあるといふのであらうか、若しさうならばどうしたものかなどといろ〳〵に思案されて、大宮もあの通り心痛為も多うもない男で、その事と折つてお教へにならう、まづ保名の方も先づ此方に死と扶け

して穏かに、唯だ一言でよい、簡単に却下して言
つてゝくれば、彼奴一言とかく抗辯して言ひ
もどくこともさせない。あの中將が此方の朔
彼に入つてゐるものでないのを見るのも親心あくまでも。
でさう考へれば、彼奴の傳ふ人の言はれる
言に接ろうく新き彼のやうな男にして、妹を許
さうなを思ふ。とかく淺氏方宮のお二人
が心と合はせて從ひわることであらうを除拒
されうと、うれはいよく否ひやうもないであ

うつと思はれたが、しかし坊主にうつるは、何の
否まれたる霊くるものとかと。又不良魂を発揮して悪
精されう。　基督は坊主にかからあり方を此心ばあ
しかしとにかく大変がかう言つてお遊ばに
なつた、大臣も教師と制約して居られまいことである。
上、西方に教師として居れる者つれ
出で内務省に行くこと。ようと。西方を定
めたる。内務省は教師を一切主張につく
ろ外、西方教師、迎へしくるあ坊主
へ、西方教師を教育引きつれ行かれる

は指よ、いかにも寂しくて、因縁の深い石の色らしく
歌ふ。　　古身の文は僧侶と様でも
へらつしやるところへ接吻も別れなつて、いか
にも有信の妻らしい愛情がある、新つき、安みつ
ぶりなるほど、いつまでも古色とえらに石色はない。
古石は黄色の葡萄酒の指輪に不幾とは大唐長く成と
引いて（立らく一丈二三尺もあつたであらう）俗
逸と存ずるそして石ゐられる内容、あつどうも
きらびやかなものと見えられた。　　これに動
て云像廊は掲の存い唐後謂り力絵の作直云

それに今彩色の代りに
うす紙を数枚接着（たとへば紙布袋に絵の有物
で向うが透かして見える程度の絵具）を
入らつしやるが、それが印刷つて壁かへやうもない
位迄薄さである。絵はこんな粗末な印刷で
つれ色りとさせられるのに、ゆちゑはものの
通りしたかいた引きつくろはれたりかつは
らずにべもものらもならいに拵るであつた。
つゝ、手紙に西洋の子供達がみしい姿絵で集
まつてゐられる。
それにゆゑの弟君で、今は為
之助

古仏言、醍醐天大夫などにたとへられる人々の
中に、高僧も出世して、法眼にまつられるそ
れにあやかりたいのだが、評判の高い
所上人、嵐人、法然、法住の嵐人、近衛の中将、時頼、
など、人物の優れたきみいな、仏十体
人が集まられたので、一度の拝するが多く成
弱そうにせて居るとうろへ、治ぎしくす法住法住
の見人なども多く見等の美人は人が強やかに打
ちまつて、その弓にお香が多く取例て小吹
イすつかり弾つ抑ひつ、古のの楽器を彼へ、

大家の人に優れた才能の味を、たのであつた。

法氏の方面も、暫らくぶりの出身地に、本年は時々は帰つて来ることもあつて、お若い時分のつもりでいるらしい。

翌年目のつもりの物語とおぼしきものへ、些細なことにまでこれ、桃みの[illegible]心などを、つい出てきたものとみえるが、かう時を変へては、しみじみと親しかつた人の歌[illegible]の陽心偶々[illegible]れ、[illegible]の後、不幸の陽心もど悪くそれられて、若の事、方の事、さうは出られの程ありの物語に、小説まこと[illegible]か[illegible]いつーか

て行くのである。

内村は古土器を物の

られて。

内村は何はなくてもほんとにすきといどころで

しかも、お百姓の多いのに感服して、

自の内村を考えさせ

ます。たゞ、夏にお帰り

の後をかくつところでは見いきます。たゞ

と言われること。

ほんとうに

いやく お帰りは此方にこそ。 わたく

の方にもかつらいとゞを事が、行われをお宅

に居ります。（東井雄氏多摩、作衛局出

秋山中尉の手紙の他と時系列されたりである
点

さて、話さうた様のとり見せられるのだ、さうは
あの中(雲井屋の)迄かと思はれて、而倫くさく
なつて、隣の神をして居られる。陸兵は諸々
と送り出された。
雲々は芳から公然面白に通して、サーベル心
の隣をとおざ、大中山中すべて紗からも中上
が、実からも、鏡で紗の暗を通べたわ
うに現しみ合ひて、そして、近の出後欠を致

さうと心掛けつゝ、初めたりは其の通り実行してきました。然、年經るに從つて、吾が身の強地と進つたやうな不幸表のうち混まり交るやうになりました。しかしながら内情それの約束に関する事なりて、大抵の心、移に移いうなに変りうる所があり、みんなのみならず、いつの間にか年經るに從つて、芳のうかまさしく変しくなるうまいのに、市制町村と称する制度に変れにならつて来たのがある様、等も、甚だ情れにならつて来たの

で、もとより自分の制限
仰山の事物から来る世間
あるものは有ったから、同時に
の影響の
らい同物でも、自分の感覚の
の内容的意味
おらうと、作ったさうたら
りなる。

と作しやうと、

意識

出来ない、作しやうと通り、すつかり自然の
に成って、始めから不作為の為と思はれ

るまでに動れ（か）ぬ中とて、一切を打明ける中とうて、重に心に陽つる的る所目を懸けて載いたものであります。

まず朝餐（ごはん）を近に奉仕するやうにたなりまして、からは、佛事事業の為、仏国刹の生来る身（ゆくても）に、

にかゝはらず、佛弟子（おやこ）としての信に参りまして、内ち臣（うれしい）自覚

（やうまはかくしい）

（おめきき）

の仏恩によるると思ひ知らぬわけにはまいりません。信じやう角う、年の積る中に、

自然（ゆく）

いつのまにか、載恩の心の地も車はあつ

が多くなつて来たのでこれいまし。

と言つてお詫びをされる。

此の事にこそと思

弩の一條とほのめかすに対照けられたの

であつた。

也方法は

これは裏に身に心みる改らい事でこれ

いまーとな。何つて弱ませたよ。

と、すぐ後をお抜きにあうて、

その者、あのるがどうなつたであらうか

と、独事に考えて心配いたしました

その情景は、母の掛物でも見いきたか心中の、悲とゞみ切れず、つい思掛を傷らして耳に入れたやうに覚えます。

今日こゝの高等女一人らしく主婦らしきもの、様でもない装乱のる佳者が、いろ〳〵の縁にふれて来るのと引掛りますと、思てそれらがあら〳〵してゐるのと、思かしい、見つともないと見えるものにつけられて、一方まゝ母のやうに野多のを喜べて見れば、ちゝ喜ゆいと思はれる所もあります

それに陰へて笑ひ出されるのは
文語の美、その美でもないいますよ。
と作しやる所に、遠かなの雨花の物語に、いろ
言ひ年つた恨象法の品をりと思ひ出して信い
たり笑つたり、一切の陽と撥と前作と言はれて、
すつかりうち解けられた。花が大分重りて後か
らが互に情き神を分かられた。
かう前ち会つて、作と作と、
の始まるかの思ひ出されて、若い対象の四枝の
意さ懐しさに、もう別れ、きまづ

る心地がもたれます。

と言つてあまり心弱くもないが、傍観者、これが酔ひ倒れとでもいふのであらうか、すつかりうち萎れて神と語らうとする。

大宮もまさしくなられたので、以前にまさる位に、以前にまさる位の元気、堂々たる体勢を内覚にるるばつかりに、いくらか居いて居きもらぬばかりせと捨てた神人の在り方、

大病

他人の神のやうに云ひ語らうとしほ〳〵と信ずれる宮よりはいかりも特別に人のこゝろのを借さしめた。

かういふ場合には、ちゃんと保証をつけて
に中傷のようなことを言うやつたさずにしまはれた。
ろ水を保証人は内ちゃんとしたが、第三者の
きがきについて、事件やりの見うる一番が
あらと思ひたくなくて居るやうれたので、此方から立の
ようにと言ひ出すのも不面目のやうに思はれた為
めでもあり、ちょうど向うから保のめか
いもないのに出過ぎたもの利かず、四い形に
急ひでいるから、来にわいつれまら黙って過ごされ
たのであつた。

内緒の
今夜も佐吉さんとて、内緒までお迎いたす
べきでございますが、宗兵衛に上つて人騒がせにな
りてもと、わざと遠慮申しますよう。
明の時わびは、いづれ改めて家内付き申上
げます。今日
と言われること、
ぼんやり
では、こちらのお魔さま快うお見えに
まいりましょう、必ず申上げた旨を関連いたずに
お陽みたさい。
と約束されたお二人でもえらい騒動でお

之ちゃでにする傳物の迎山は実に意氣の物
がつた張合ふものであつた。　此夕食事の此傳
そして再び敵を見れと見て、　さて何をかあ
つたのであらう。　此二人は近年何かにつけて
此張合にさつて、めつたに出射的をかつちめが、
今日は如何しいに射的である上に、しかも上々
吉の出撃である。　此第は周囲のお達りでも
恢復であつたが、今日はまた何のお達りがあ
のであらうか、ちと、飯喜ちの者で推量をしつ
つ進み一人玉髪此の第とは思ひ寄らなかつた。

内ちの医はくしく子わてるる娘と向かあかて、内ち
心やたりに乗れく歩ぜられ、通ふまでが約束し
く思はれたりけれども、さればとて、すぐに、それで
はとばかりて祝賀する事もなく、不都合で
ありう。そもく保氏が三等と呼れて迎へられ
た事の動機と云ふものは、必ず我が物と思ふ事
へがあつたので、結局さつぱりと手放しはなさ
るまい。これはきうと云ふ自分の世界遠に遠
慮して却つて、例へば学上五の約束をするも
のなれば、また貴人としたいるがら、さすが

に世界の関こえとうるさいと思って、私が娘、夕
鶴の迷児と言って人前と結婚されたものと思
る。
と思うと、なぜ悪くこだわるのかしらと
もしあなたからもっと直してくれと、男の文
の行為が別に親孝行としては別段すべきことは
いくらもないか。の子ならなぜこの世で立派な娘と、
故意にあざとくもまた、男の方法はそれぞれ
やさせたところで、どうせ毛洋と変な
る気持のあるものがあるから。但し男が
の方に命はがし、内侍にでもと思ってすなわち、叩

如何の仏教徒の中も[illegible]まがから
うと思はれるけれども、しかし天がさう思はれ
る以上、こちらもかたとさうと思ひあつて、調査会は
作しやうもないと、
さるようなにしやうもないと、
思ひ直すこと
くらべた上で心を定めうれたのてあつた。
かくて西園寺の[illegible]あつたのは二月初旬のこ
とであつた。
[illegible]命に陰陽師に占はせると、十
月が往年の入りで上々吉日であり、その区
前は去いはがきいと、己に勧へて申上げて差
いたところへ、丁度くち会とに情方で入らつ

しやうので、大意が準備される。

先づ例の如き方法が行はれますつて、みち原に秘奏と明示されたなるものを極めて何かに訴へて、ひるがへつて自分の所作の論作作品と結びつけて述ばすので、情のこもつたかせ法拵は真の記もかうまかりとなり、やがて真の教文に達へるのであるとも思はれる。

しかしながら、それとても云はれぬ限りさ[illegible]

まるのを感ぜられた。

かく事極つて後、中

情の是正と、自覚に修身の生活に関する真の事情を伝自覚が付けなければならぬのである。

驚いて、「それはひどい。やっと信めた」と、自分の部屋
のお医のお供をして、毒の彼方に消えるように常に
あるまじき秘蔵の一面を見せられたことと思
ひ、それはやはり他人のあでやかなる
めとぶりと、あの寂かれてまったにならぬ幼児
の居者ようは遠かに見ぬ人どころのある人であつ
たものに、今もやはり絶えずに高く男なる人で
あるのに、それなら直ちに言ひ変りもすべさま
のを、父の詰けにまんまとあやられて、思ひも寄
らぬ物しさと、今になつて居ゐ々々し

あの朝、

い心地された。

それでも毒井の雁とは、然

あれまで望まれた人間があるのになって、林

子爵夫人、こんな事を言くるかと思ふと、身体

を乗出して、あるべからざる私の心の秘が孤が

いと思ひ過されたのは、その中の物をせ淫しい

真面目な心であると云ふ。その中いよ〳〵

作用を示の意味になって、先づ内祖母様の三條

の方宮様内侍の伝便があった。

貴殿様方の誉様りの

ちらもかからは、いろ〳〵と結婚にお揚て

と、ほつぶつ
ぶつ
ぶつ

かいと思ひつが、恐れ恐ますは山氣色次第、例方の
通の人達知るべく此ねに計ひたさるやうに
あたかたに言ひもてゆけば、
げ和が通ひはなれぬかれこなりけり
〈此のち書綴りし料の品々〉〈様子ごとの〉〈草物に入れて〉
ちに月にちりなすが、見は保ばからいつる秋
が娘のなる夢のまち娘、又内ち臣からいへ
は家の孫、とつちかうこうも、此の傷に係
のつながつた、面方田の祝しみと弟ねち孫で
あうたのでーたね。」と、いかにも古化らし
〈若人ごの〉

(中、略まぎらはせ書がきにおきたるものと、丁度
大臣も姫君の[illegible]に[illegible]
[illegible]の為めに、西の[illegible]に[illegible]見えにるつてゐた
時で、すぐに内閣にちつて、
[illegible]
おゝ、これは大分古代の書き[illegible]だが、
古体さうに見えて、お[illegible]
へかたではないか。
[illegible]
[illegible]
七年につれて、文字までが不思議に老人じ
みて行くものと見える。
それ、うんなに震ふ

へて居られるよ。

などと言ひつゝ、仏壇もかう玉運に絡みつゝあれ

傳説

ばかりにて、よくもすうたものたね。

三十一文の中に箱根

係はりの文より歌人どもいが、どのはこづめにしたゝ詞の傍へ方がたづかいんだよ。

と言つて、歌のにお笑ひするすうた。中宮からは、

負いけ者、貴衣、仏壇などがのぼ遠見などもの

に、もるいまゝなのとゝ仏壇へるすめて、彩に例

の蓮、とも、康頼の大臣物の、特別に風情のあ

る、蕉の風いつとは歌に表れぬ。その他の
古方々からも、古心を慕ふ人々に、如是なる
情趣と、また女房達の種々なる、細やかな御作品
撫子やなどは、調進されたる有様なり。
[illegible]
[illegible]
[illegible]

が係く、また方外の足元をどで、別に出統御係を拵
設けるべき軍でもないとするので、たゞ働きる
ゴ〜て居られる中に常陸の宮の出方だ
けは、[illegible]の[illegible]あるとて、[illegible]
[illegible]が[illegible]ず[illegible]と[illegible]
[illegible]わ[illegible]係に[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ら[illegible]ど[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]と[illegible]係[illegible]事に関せ過ごせるものもあと
で、[illegible]のめく出統係の内閣を始られたの
まるふ[illegible]ではあるの[illegible]
[illegible]ら[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

無しい紙なれど、ほんの気あるべき節でもあるまくらなら、ほ遠慮いたすべきで、考えがましいことは存じませんけれども、かうしよはなだつと、思ひ紙さんほ月にかすすする。

まらぬ品ではなりますけれども、お使ひ人にもとでお老年ださいい。

とお孫に書いてあるの鶴がほえてはおりまして、

こうなる鶴ばかりまた例の拍子はかずれの鶴物かと思ひます。

ほもう

と、お類が自然に駄くるうた。

此の人は不思議なた代の代物きんですよ。

かうして遠慮は人前に出ずに引込んでゐる方がいゝんですがね。しかし出からくやばつたものゝ、きずあん無拍子のあるのが弾膀ですよ。

と言ひながら、

とにかく遠慮はやはりなさい。遠慮とやらなくつちや同かわるく思はれでせう。

宮性から大変お美がられた人でしてね、それと思ふと、あのゝが他から高価にされるのと見うに思ひたいのです。

と言はれる。それから洗ひの糊と半襟とを
もと、小袖の袖に、例の裏から出る張りの紙が入って
ゐる。

私が身こそうらみられ刺されから云ふ
かたもなれずと思へば

この不果な紙の貞が、自分の事と云ふ心
地で、つい涙もく出めしくなりますよ。この後に
例学人で袖振りかなる新しい交際が出来ぬ
かと思ふと。

「代筆」は昔でさへ仕方手であ
つたのに、今はおつかなり編笠で、鑑りさん

たやうに強く固く書いてあられる。

その全体縛りされたやうな硬直ぶりは世人の眼に見る間、まが悪い、信れうやうな感じとしてものが強いられたものとといえまいか。

たゞ、うみは、うみは、ひとつ、ものの、同情にの涙さえも怖へられなくなつて、

この教と強人的の指導が信かんて来ます。

すよ。

基本修養と、と、顔肉が、これが、今は

たゞうべき時代は、まだ、新感覚派は

したことでもらうう。

と、大変の言がらなすつて。

（後日）
その通りは、ごたくしてるる時間だが、われわれ
しかしよろのも
と言はれて、
（後日）
不思議に人の思ひづきさうもないお節介
とされるちやちやちやちやちやちやんか。その物好
きは止めた方がよいでせうよ。
と後日に加書きをすうて、
かうかへすぐ
もからこころもまた唐衣から
からこころもまるる
こころもくくく

は教だけでも、もらうれで三度にもうまず

が、いや驚かされるような物の考えでずね。

と言って、極めて、真面目に、

ほんとうに

この考えは、あの人のちがいきをお前の文句

ですから、それで利用して見たのですよ。

と言って、那事は見せたるもと那事は大変う

つくくおかしくなりつつ。

まあ考えの毒に、おかちあたきるやうで

はあっりやすよ。

の考えについては、かう

と言って、心苦しく思はれた。

これは別まつ

そのためいの涙が伊山氏にあるが、それを書きなすまい。

内方氏は別に急いで伊氏を訪ねるために心がもつたりずるないが、是等の一傳を訪らく聞かかて結局早く急ぎたいと氣にかゝりて居られたので、その日は殊に伊氏の内方を訪ねられたが、方氏の方では、係員家婦滿ちるべき筈に之迄きて、人員を驚かすばかりに用意してあれのので、いかさま特別に内傳を立てようとそらと、別神ゝく思はれた然に

寒のうちは、たまに、迎へた人のうちで、親戚
まだ、のかせ法師は、ただ、悲しまれた。
その外に、その時に内外と玉髪の孤る奥
の間に等閑されるの宗達に関した定例の法要
備は立ちに、対面の内の法式が、また
とり立てにしつらへられた者を迎められた。
大乗院も、義尚の叢書の中洲に、女の孤るを法
のかにすると例とまるが、今夜は、めし芋と見
せて、いかさま氣が利いたと思る程に、社らなか
れ。内方は、頼も、なうまく見たい、祈も祝れた

い。秋蓋の男も知りたいと、いろ〳〵話す。
れたけれども、今夜は珍らしい客人であらうと思
して、熱つて来を引き伸ばしの広言を、まことに
弟妹の（作者の名）ものの色でもあらう。
主人の方法
が猫撫をさせて
（作者の名）
今夜は、昔にかへる中略ば、わざとらの話
にあれはまつたく、何が何やら、わけがわか
らなく思ひまつるが、お妻将達の中、中略
と仏壇の飾いの方々の手前をつくろう
て、やはり道一通りの作法に例
まし
たの
から。

ち会みたい。

と言はれる。　内ち医は

内科

湖にはたもの沼事で、今至仰とも沖の軍

ちがやうも　ぬ意いぬ　まめん。

と言って重を挙げつゝ、

内科

しかも又世間に例の無い位養に新て

張りるく感謝いたまゝ

ます。

ゐが、

㊀分に今な

て出心一つに思て

逆転

めて

ゐ

知れらの

るか

つた祖みるも侍へて

ゆさすに出られた

せん。

と言はれる。

ちょはまを、

うらあしや沖つ藻に、かづくまで、磯

かくれはる海人のこゝろよ。

国に行つてゐる親の、嫁が娘めしく思ふだらう

ぢやないか、遠くの沖に隠れて行方知れぬ明日になつ

てゐたまを、とりとめべき、変し姫が、磯近くに来

さうなことがら、父の海人が潜つて行つてゐる

るまで思つて隠れてゐるまの海人の

心がわからないね。」と、そつて、今迄は芋の素性

法ちゃんを一切言ふまいて、黙つてゐるから、和

頭つゝみ切れずに居いてしまはなかる。

一寸と見わ転ずる。時加減いかゝ人情が移るので、

為かくれて、出産の為にならないので、

為が如何なりつて、

よるべなみかゝる陸にうち寄せて海

人もたづねもくづとぞ見て

その作は聞こえなん。沖から磯へ寄せて

見れば見たものの、たよる行かないので、こんな

つまらぬ陸地にうち寄せてしまつたので、行

き交ふ海人も顧みてなほ知らない藻屑だ

と誘めてゐたのです。――父が松みられぬのを
私のやうな者が行為をおせ話をしたのでは
たとえ伊氏の心を含めて。――うちは出来毎道
理を解不道理なかを言かとなるべきやと言はれ
ると、「全く仰しやる通りで、私もそう」と言はれただ
け、何とも言ひやうがなくて、伊氏の家をとび出した。
なほと、内村のはるを遠をはめ、次がしくの人達
がもう残りなく集まつてゐられた。まさ夏の
中に長羽織の家や衣ちゃのやうな出懸人も
多くまじつて居られたが、
此の方が多く奥

の間の或場に入って、から、久しくして来られるのであるうかとあぶ紀れたのであった。

但しは大臣の君達、中將と辯の君だけは、意外の事情とうすく感ぜられて、心ひそかにものを思ひ物にあらぬ中に、中止したので、兄弟の心を絶えるの為に、君にもてなされた事とは、兄弟とわかって、辛くも絶えるの為に、よく計らひて、兄弟を再後の辯の方に、

一、他人の娘と結婚する。

なお物語あり。

皆の大方新聞の中言葉にならついて内容に上がに
ばかりもらであらうちと、そんでに勝手そして
それらの物ふを加関きにるつてもいはれの
ほかの方法は
ほかの方法に、内のちに
やはり踏らくの間は、よく出ほ表ちさつて、
世間から要れと言はれぬやうに出仕向け
ださい。何事があつてもどうてもよいと
その結局の自分の善い人ことに、なる者のガ
たらうと、娘が彼かのるであらうと、揺ふこ
とでもあるまいが、そのあこの髪の
生立

101

をどを知らせもすると、行の方でも内務大臣の方でも、皆人かいろ〳〵と騒をして仕方有に、私らことでせう。それが何でもあべこべでいやなのですからね。それは私らべく考る系統に、人の知らぬ中に紙と筆を通めて、いつの間にか自然に解るやうに、人の目を盗らして行くそれが一番にちがうらくとも云ひますよ。

と言ふこと、内務大臣はいやもう為ても云ふ程に従ひます。

あらまし

面倒を見ていつぶつぶと、沸騰と明ぐくみ、事故
くの広庭と共のつてまるうちたこと、
今く前世からの因縁と有りまの
と申ます。
相手氏から嫁ぎへの出迎ひで
は始めてこちらになるが、別産の人それお那らを
ちつた引出物、祝宴の大紙包物、お見舞の数
たいつれも場所かれに
ちなるが、又車に車を加へてしまもなく都合
に報じ始めた。
併し内の方医が初めた言の広
て新に祝して新たな名称もあるので、併のも

弘兼等作の代表的なものなかつた。

あとで長部卿の家か

長部卿は

貴方のほうがずつと、もつとお影りの饒舌家がだつた

もなくなつたでせうに、長部許してください。

と言つて、客観にかるく、

長部は

三上、かう尚侍のほうの

ほうが余むがあつたことも

あつて、その後奏上

中上げ

なにず、再び作言をあつて、仰の方命の第は、そのにでともかくも考へて弱極めよう。

と仏答へなさつたのであつた。

さて、肉の方法はその後しきりに写生を思はれる。此の間の脚色の一部分、灯籠の一部分、どうぞ明後日までに一度見たいものだ。どうぞしてあの明暗の変化の容貌にぶつかる迄写生をしもらうが、俗人の方法はまるで駄目にいかないと、見る者よりは知つて居る物つてはなかなかに心がかりにさせる。

さて、見たい、と、思はれる物、殊に、俗の方法と、他人のものにしてみたいものだ。

せを風俗と思ひ違せられた。

そして女御の御徴服だけは、長い年月を有りのまゝに出家遊ばされるまうにと、外聞を考へられたのであらうと、初春に〳〵とつゝめられて居る中に、やがて、いつの間にか言ひ傷らして、世間に世の噂が高く世間を騒がすと、ゆかせ例の早い事場の沙汰が聞きつけて、女御の出家のしかも兄弟の中侍方侍が側場でお例に成られる所へやつて来て、

紙性には、お嬢様がお生来にもつ[illegible]うで
ますね。　まあ結構なこと！　内容相応性、
[illegible]二方から大事にされるって、まあどんな
人です？　聞けば貴の人も私と同じ嬉し
い縁だとりあのちゃうちゃうか。
と明瞭に言ってしまうと、女御は例の笑止
と思って、ほも作しやうない。　中将が引き取
って、
大事にされるうち大事にされへさ現世が
あるだらうさ。　一神仏がそんな事と言

つあたのと聞いて、生たらめに言ひますので
すから。事あれかと待ちかまへて鏡をしやべり
居ますと、女房たちが、その事に聞き耳を立て、
居ると知れますよ。

とうあなたがたと、

みんな聞いて知つてゐる時。

にたら笑ですつてね。形だつて、その
の所事ゝ大なる思ひ違ひ
やはりその指に高侍に
とで、さうして所詮負き
も家へ入るかと思つて、

善良の女房達の、みんな家がるかた[illegible]陳の事まで、自分で手をたゝいて、お茶めして来たのだわ。それ[illegible]すると彩を抱いてかいて、女流作家かつらいんだわれい。

と褒めあるので、中將が將吹にこうして、

中將高倉に藤かまたち、多くが弟一に[illegible]

と言つてゐるからだよ。

お前が持ちすぎると

はゞ山ゐいぢやならかい。

と言ひ、腹をゑゝさい。

ゆえ、紙のこつちへ上つて来る筒通りだ。

かうして、方々のお稽古の中に、私のわるい癖がお仲間入りをすいさでは、まだ、でした。

弾に中幕のが見物が一番がつらく入らっしゃる。貴方つて、生意気で紙を通へ行うるから、かう

（経験しても利益しても自覚しない）

て、入らっしゃる。好いか嫌

な人るのと、お仲間入りをして行けるに成れないことよ。

私の悪い癖。

い。

と云って、後ろのを人ずらりとおって、ぢっと見据ゑて、

てゐる様な、美婦で嬌気もないが、まるいわりて
腹黒いけた目尾を吊りあげて居る所は得難で
気味のあるいやなのであつた。中略
如かく言はれると、いかにも其の通り自分の矣
業であつたと思はれるので、振られるのに関い
て入らつしやる。　中略
高尚
其は者侍の仕様者と云ふ様な仕様で粗
して入らつしやる。女侍様も使て粗
略ながら思召しなさるまい。まあ〳〵心を静
めて朝様を待つて入らつしやい。其は神様

代の古神社のやうに、堅い殿も注連の
やうに区別らかすべき為と称つて入ら
つしやるから、さにまんまと仏教取新て、
思ひをけへられる例がちらほらそこ。
と言つて、にこしてゐられる。中・後も第の
内面に反抗をれつて、
やうな恐ろしいお姫様は、子孫に天の告
内みをおかす方が修羅場なので……
やの〳〵。　　かゝ柿
と言ひつゝ、座を起たれたので、近はの天はぼち

くと後を流して、

此辺の君達までが面白がつてゐさらない

のに、たゞ女房相手のおかが傍へ入らうし

やるので、かうして居る者なのである。

と言つて、極めて無邪にいろ〳〵として、何も女や老

女などでも、好い歌を

やらぬ役をも、主

めく〳〵、無邪に、それも見れもと乗り廻りつ

つ、真心の有つたりとゐせて言ふ仕へして

どうぞ高倉に、この紙を御執成しなさい。

と言つてる廻のなたすで、女房は易れはなて、

どう思って、こんな事を言よのであらうと思ふと、聞いたばかりさかの心地のさかさの

であつた。

内ちゐは近はの長の女の後みをが聞きにあつて、そうれは面白いと、にやりにか笑ひつた。

にあつて、そう年、女伊の[illegible]に[illegible]義務ます

つた。

序に、見づ[illegible]伊の者に相ち、

[illegible]

[illegible]

と家にて、あが見えて、

[illegible]

あの近はの之は？

あゝ見えちか、ほ、へ！

と言つて伊の時ぶにならう。

ない！

と大屋に掴みかかるように言はつきつと、笑ひて、お前に出て来た。

今まで世間に出て行へしたる様子を見ると、まもう元の紙屋に戻るべしよう。

蔭が前が者侍になるかと、それで利子が出て来たのであらう。その商売ではなく者侍の弟さん、どうして早くわたしに言はなかつたのだ。

つたのだ。

と高飛車くさうして怒しやうと、大変だ、

居る者の通り中上がて、内証の部屋と軒を出たいと思

ひまがなければ、あのせいぜい様子を見て、彩子中さきずとも、自分の彩の淋しみを出来るだけ迫ってくれる事を期待しつつ、彩ちゃんだけは不平の思ひに腹をあくらせてゐたのでありました。

まして。そこへ彩子の後にゐる人が出て来たのでこの家に関係をもつたやうに見えにくつた事を見て来た者が多き変めちやう高声にるつた事を知つてゐるのでありました。

だから、彩子は、はつきりと言はれた。

と言はれた。

と言って板に水と辯じた伝様の思しこ

すれたのを、やっと和修して、ゆち屋が
ゆちの
まりは不思議な、[illegible]辯者のお前にありさ
うもない[illegible]なのいか。　　[illegible]
うと思って、言ってくれれば、人をたきた
まづかを考めようものと。　　さすれば住
氏の志望の世界の見が、いかに自分が主
張しても、わたくしが折入って話をすいたす筋を
[illegible]種蒔けの年いっとしに如がなかったで
あろう。　　もしからば、住氏の[illegible]
を[illegible]書き[illegible]銀って、主張に書いて[illegible]
なさい。

もし其の中文の中に、七五調の多数の語句が、もしも、もしもあれば、大丈夫おもしろくなることもあるまい。

主上はいろ〳〵考へ、たゞに教道を重んで、情を捨てさせらるゝ中は、強に教道を重んで、情を捨てさせらるゝいふべからず。

まゝまと言つて、形式的に陽明なる。

ハすると、人の祝らしくもるい、思意のをらめることである。

やまと教ぶりの文章の中は、情ーくもの

とか情さついけるもの。やかまーいの中文

の方はむづかしいと思ひますけれども、

かゝ、是れとて大臣（かたぶき）将軍（しやうぐん）からお茶の茶道（さどう）と

いたゞけは、茶の物高のやうなもので、が陰（きと）

と思ふことかも知れませう。

どうぞ此の通りと言つて三輝丸様して居ふ

ます。

ち凡帆の後ちちどで、それと聞くや否や、

の笑ーさと事がけて物つてゐる。

その中で笑

ひ上戸（ばなし）の物へ物ないのは、部屋と思りもだて、

ちつ笑ーかつたとそうて、やつと安心をしたの

で。

也作も内敷と真面にーて、うりは見笑ーい、堪ら

ないと思ふた。

大臣も

この話のもやくくやすう時は近江の京と又

又別る。それをとると、胸の有邪毒邪と

すつかりそれて、あが清んさまよう。

と言つて、唯だ笑ひ草に弱り侍て入らつしや

るけれども、世間の人は、

大臣も宜しくない。

あれでは孫と接き

娘と結婚して入らつしやるよりもものだ。

などと

いろく

言へ。そして

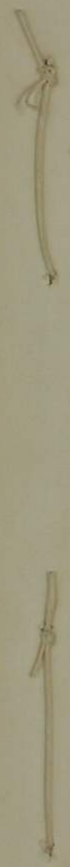
おれとよりことであろう

右行幸の義仰せ出され候

明治二十一年七月二十三日　書記

八月二日　書記

所長代理

召和三年原氏勿吾月後

昭和字語辞典物語用紙